

---

# KURAKAMI

国見炯

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

KURAKAKAMI

### 【Nコード】

N2646T

### 【作者名】

国見炯

### 【あらすじ】

クラモチ キリカ 蔵持霧佳 22歳。境界線と呼ばれる場所で一人の男にあつた事により、面倒な事に巻き込まれる事態に陥り、異世界で暮らす羽目になった女性（中身は）のお話です。 女性 男性の肉体交換の為、BL/GLな表現が出てきます。

## ブログ（前書き）

不定期更新なお話しのブログです。  
BL表現がさっそく出てきます。

## プロローグ

世の中に自分と同じ顔は三つあるという。

私は未だに会った事はないが、これからも会う事はないと思っている。

多分同じ顔とは会わないと思うし、これ以上自分と同じ人に会いたいとは思っていない。

ああ。この辺りで補足をいれておこうかな。

今回会ったのは、自分と同じ“顔”じゃなく、自分と同じ“力”を持っているらしい。

姿形はまったく似てない。

似てない以前に、私とは性別からして違う。

そんな男と、境界線と呼ばれる場所であつたらしい。

らしい、と曖昧だけど仕方ない。何故なら、その時はふわりふわりとして肉体の感覚がまったくなく、多分夢じゃないかな、と思える程度だったんだから。

私の悪夢認定の男と出会ったのは、不思議な空間だった。

自分自身もそうだけど、目の前の男も同じような感じで、透き通って見えた。

幽霊…にしては存在感もありすぎし。そうやって悩んでいると、やけに綺麗な顔をした男が、徐に口を開いた。

「ああ、これはそっくりだ」

黒い黒曜石のような髪と瞳。

緩く一まとめに縛っているが、妙な色気を放つ男には良く似合っているのかもしれない。

実際着ている人を私は見た事はないけど、詰襟であろう服を鎖骨辺りまで開き、そこから覗く銀色のネックレスがその色気を更に倍増させている気がする。肩にかけているのは軍服のようなものだろうか。

その特徴としては、全て黒で統一されている事だろう。

身長は175cm程かな。私よりも10cm程高い。

身体の線は細いけど、筋肉がついていないわけじゃない。ここから見える首筋には無駄のない筋肉がついているように思える。

十人中十人が振り返るような美貌を持つ男は、良く通る美声で私が今思った事とほぼ同じ事を口にした。

「俺と容姿が似てるってわけじゃねえが、黒い髪と瞳は色気がある。程よく付いた筋肉ってのもいい。胸が控えめなものも合格点だ。

俺は別にメロンが好きってわけじゃねえし、自分が持ちたいわけでもねえしなあ」

「ああ？ 幻聴かな。イメージにそぐわない口の悪い美形がいる。つーか夢か。夢だな。夢以外にあるわけないし」

「声も悪くねえ。俺と力の波長は同一。魔法の力ねえってのは馴染むのに時間がかかりそうだが、まあ…嫁に入りゃあ気にならねえか」

「というか、さっきから何？ 大きな独り言？ 説明してほしいんだけど？ つーか胸が控えめって見た目からそうだけど、気にしてるんだから面と向かって言うな。

骨がりつちよとかがあだ名だったけど何か？ アンタに関係ないだろ」

ケツとばかりに言葉を吐き出す。

「というか、メロンを持ってない女はメロンに憧れたりなんかしちゃうんだって。わからないだろうけど。男の人には。」

「骨がりつちよ大いに結構。つーか、アンタ綺麗だぜ？ 溢れんばかりの色気に気付いてねえの??」

「だから合格だと言ってんだろ。何せ、交換すんだからな。力が同じつつつても、流石に美醜が違い過ぎりゃあ俺だつて諦めたさ」

「……は？ 交換って何??」

「俺さあ…国じゃあ相当の魔法師でなあ。家柄も程よく顔も良い。年齢も22つーわけ将来有望。なんつーか、今回17の姫君の婚約者候補に選ばれちゃってな。」

何人かいるんだが、俺が一押しして臣が多くてさあ」

「別にいいじゃない。姫様でしょ？ 国家権力万歳なんじゃないの??」

「そう思うかよ?」

「思うけど」

国に仕えてる魔法師とかいうヤツなら。

というか、ファンタジー…。

「俺はあよ……男が好きなんだよ。」

組み敷くより組み敷かれる方がいい。っつーわけで、俺と同じ力を持つアンタと交換させてもらうぜ。

力が同じなら、俺もアンタもそれぞれの肉体を使いこなせるってわけだ。安心しろよー。揃ってる男誑かして骨抜きにして、アンタの家族も幸せにしてやつからよ」

「ちょっと待て!! っって何?? 意味わかんないっていうか分かりたくないんだけど。というかそれだったらアンタの身体で男を誑かせ!! アンタならいける!! 寧ろその美貌を使いまくれ!!」

っつーか、さっきから目の前の男の顔と言動がまったく一致しないんだけど、その違和感は私だけ?

「女になりたいんだったら、私の身体じゃ貧相だって!!」

「はあ? 色気あるって言うてんだろ?

アンタだったら俺もその気になっかもなあ」

「はあ? はこっちの台詞だ馬鹿野郎!!」

「聞けよ。言っただろ？ 俺は別にメロンを持ちたいわけじゃねえよ。あんな重てえモンごめんだな。」

女になる願望はなかったが、アンタの身体なら悪くねえ。しつかり子孫繁栄に勤しんでやっから、アンタも頑張んな。知識交換は目が覚めりゃあ済んでるわ」

「というか、アンタも私の話しを聞けーっ！っ！っ！っ！」

## 1・主人公、途方にくれる

目が覚めたら異世界でした。と云っていいのか迷いながらも、ベツトからその身体を起こし辺りを見回した。

起きてから思う事は、夢じゃなかったのか、とか。あの野郎今度会ったらぶん殴る等なのだが、今の所それを言った所で仕方ない。忌々しげに長い髪を後ろへと払うと、状況を確認する為に部屋の中を歩き回るように置いてある品を確認してみる。

あの男が言った通り、知識はある。

知識がなければ途方にくれる所だが、知識があつた所であるあの男が元凶なのは代わりはない。

だがしかし、知識があつた所で非常におかしな感覚に支配されている気がする。自分自身それを知らないはずなのに、脳に浮かぶのだ。この世界の事が。

意味不明な文字も理解出来るし、口に出す言葉は明らかに日本語じゃない。違和感しかないのに、淀む事無くその知識を披露出来てしまうのだ。

ハア、溜息をついたら、偶々鏡にその姿が映る。

会った時に感じた感覚そのままの感想を思い浮かべれば、尚更苛々が募るがここで身体を殴った所で、痛みを引き受けるのは私だ。かといって、私の身体に宿ったあの男をぶん殴れば、痛みを訴えるのは自分の身体。

どうにもこうにもやるせないというか、腹立たしいというか、何て言ってもいいかわからない。

失ってから初めて気付くというか。

例え立派なメロンを持っていなくても、骨がりつちよと呼ばれようとも。まな板や洗濯板と呼ばれようとも。

やっぱ自分の身体が一番だ！！

そう叫びたい。

叫びたいが、実際私が口を開けば喋るのはこの男だ。

やるせない感情をそのままに布団に倒れ込み、頭からやけにふわふわの上質であるう布団を被る。

もう少し眠ろうか。

現実逃避をしてもいいだろうか。

好都合な事に、この元凶な男　ナディアス・ヴァーティランテ  
イ・セナイラーガという長ったらしい名前を持つてるが、どうやら一人暮らしらしい。

腕のいい魔法師というのは本当らしく、個人の力量で稼いだお金が桁違いに溜めてある。ハッキリ言って、家に置いてある調度品やらその他のものだけで、私が稼ぐ一生分以上のお金がかかけられている。

一瞬貧乏人のひがみ根性を出したくなかったが、やめておこう。

それに、これだけの財を築き上げたくせに、あっさりと捨てて私の身体を奪っていった……ホント何を考えているんだろうか。

ああ、男性が好きなんだっけか。

女になる気はないけど、私のまな板ならいっかなんて言ってたなあ。

で力が同じとか？

じゃ、この知識にある魔法ってヤツは使えるんだよねー。

わあー、ふあんだじい。

「っつーか、ボーイズラブを宣言するなら腐女子を探し出して降臨しろーっつー!!!」

偏った意見ごめんねー。

でも腐女子だったらこの美形であれやこれやって結構ネタなんじゃないかなー。

喜ぶ可能性もあるじゃーん。

あはっはっはっはっ。

……。

次の瞬間布団を力いっぱい蹴り上げ、私は苛立ちのままに枕を壁に投げつけた。力が同じだかなんだか知らないけど、問答無用で人の肉体を奪うってのはどういう見だ。

というかさ、肉体交換の方法の知識がまったく残ってないんだけど、あの野郎故意に消しやがったなッ。

「無駄に力あるなこの野郎っ。流石男プラス身長10cm。まったく嬉しくない!」

握り拳一つ。

とりあえず壁を殴ったれやー。

苛立ち度が行き過ぎて突き抜けた瞬間、衝動的に壁を殴ろうと拳を振り上げ、力いっぱい振り下ろした。

が、次の瞬間には驚きの光景が目に入る。

「え……」

キーンと音が響いたかと思うと、真っ白な壁を拳が突き抜けた。

「はいー？」

拳は無傷。

というか衝撃さえもない。

壁は30cm程の穴が開いてるし。見間違いじゃないよなあ、つてうろちよると忙しく動いてたら、開いた壁の穴から覗き込んでる男に気付く。

つつーか、一人暮らしだったよね。

何故に男がいる？

ひょっとして恋人か？ 一夜の相手か？ んな相手がいるのに人を放置するんじゃない！！

突拍子もない思考が怒りに変わる瞬間を見計らったように、覗き込んできていた男の姿が室内に移動した。

ちらりと扉を確認するけど、開いた気配は一切なし。

ああ魔法だ。唐突に言葉が脳裏に浮かぶ。

「またやったのか？ ったく、その短気はどうにかしろって言うのだろ」

妙に親しげな男だなんて思ったなら、何故か私は無意識に男の前を通り過ぎ、ベットへと腰をおろしていた。

「うるせえよ」

で、スラスラと流れるように悪態をつく。

「テメエも相変わらず暇そうだなあ。っつーか税金ドロ？ 真面目に職務に励めよ騎士団員さんよ」

というか、この男ホントに口が悪い。

知識にある通りに行動したと思うけど、どうやらこれが標準らしい。

しかし、美形の周りには美形が集まる法則でも存在してるのか。

目の前の騎士団員の男の名前はアフィデイス・ガーガルド。深い藍の髪と瞳の持ち主で、髪は縛れる程じゃないけど少し伸ばしてる感じ。

色とりどりのガラス球みたいな飾りをつけているんだけど、ナデアスの知識でそれがただの飾りじゃないって事はわかる。

体格は騎士というだけあって、この身体よりもいい肉体をしてるというか、コイツがナデアスを押し倒してさえくれれば、私の身体は無事だったんじゃないかなあ……。ってただの友人か。

慣れてない所為なのか、直ぐに取りだせないけど、少しずつ浮上してくる知識によってナデアスとアフィデイスがただの友人だという事がわかった。

というか、のべつまくなし見境なしじゃないのかー。

てつきり、手の早い男かと思つてたら意外とそうでもないらしい。まったくもって嬉しくないけど、この肉体の知識もあるんだよなあ……。なんだろうな。嬉しくないなあ。

「相変わらずナデアスは口が悪い。仕事前によつた俺にたまには優しい言葉の一つもくれよって、ナデアしなあ。無理か」

苦笑を浮かべてるけど、その表情はあくまで優しげだ。友達なん

だろうなあ。中身まったくの別人なんだけど、気が付かないもんだね。

「なら聞くんじゃないよ。つつーか着替える。出てけ。あー、壁直しとして」

当たり前のように不遜な態度でアフィデイスを追い出し、ついでに壁の修理も頼んでおく。壁を壊す事はかなりあるらしく、形状記憶の魔法をかけてあるらしいんだよね。

で、ナディアス自身直すのが面倒だと、よくアフィデイスに頼むとか。

というか、この男は本当に何様だ？

本当にこの男が姫様の婚約者候補でいいのか？？

この国の連中の目は節穴か？？？

はあ。

もう一度溜息をつきつつ、とりあえず思考にブロックをした。アフィデイスはまた来る。私が許可を出さなくても勝手に入ってくる。流石に、着替えを見られる趣味はないから、とりあえず着替えな

いと。  
重たいのは身体が気分か。

両方だと思うけど、私はクローゼットの中から真っ黒の襟付きのシャツを手に取り、下は見ないように着替え始めた。

まだ、下を見る勇氣はないんだよね。  
つるぺたの上だけで十分衝撃だし。

本当にやっていけるんだろうか。

そんな言葉が、喉の奥につつかえた。

## 2・爽やかだと思ったら危険人物

気が重くて重くて、手足の動きが鈍くなってノロノロと着替えてたからですよ。見事にアフィデイスが中に入ってきましたとも。

「あれ？ まだ着替えてなかったのか…」

「……」

意外そうに言うアフィデイスをジロツと睨みながら、私は上着を肩にかけてベツトに腰を下ろした。というかさ、魔法師って言う割りに、何故軍服っぽいのかな。

この詰襟とか装飾とか構造とか。何処からどう見ても軍服。アフィデイスの格好も軍服に近いものがあるけど、やっぱりファンタジー要素満載の長いマント。私だったら引きずる長さだけど、身長のある人はビシツと違和感なく着こなしてる。美形だっていうのも関係してるんだろうけど。

色彩はダーク色。濃い灰色に銀でアクセントにしているんだけど、それを着崩している所為で見えてしまう鎖骨。無駄なく引き締まった筋肉。

溢れんばかりの色気。

あー…近付きたくないな。こういうのは女が絡んで面倒くさい。

私の超がつく本音だけど、ナディアスとアフィデイスは親友らし

いから無理だろうなあって思う。なんせ、この唯我独尊男の自室に許可無しで入り込めちゃう相手だからね。

「そんなに姫様との見合いが嫌なら、俺が叩き潰してやろうか？」

考え込んでいた私に、アフィデイスがやけに真剣な眼差しと声を向けてきた。別に姫様っていう人の事で悩んでいたわけじゃないんだけど、アフィデイスに言われるって事は元々悩んでいたのかもしれない。

追い詰められてたのか？

あの男が???

人の身体を勝手に奪って、男の身体を押し付けたヤツが???

んなモンは却下。

どういう事情から知らないけど、人の身体を奪つといたからには一発ぶん殴らなきゃ。一発で済めばいいけどね。

「あ？別にそれで悩んでるわけじゃねえっての。かつたりいけどな。っつーか、俺は独身を貫くっての」

はいはい。自動返答ですよ。

ほつとくと喋るから、身体に勝手に喋らせといて私自身はどんな情報も漏らさないようにしっかりと聞き耳をたてる。

知識はあったとしても、私　つまりは蔵持霧佳という人間がその知識を知っているわけじゃない。だからこそ生まれる違和感と誤差。身体に刻み込まれているこの世界の知識とナディアスの言動。

これは勝手に口から自動で出てくれるけど、音にした後に送られて情報を理解するのだ。

はつきりいって、自動返答機能がついてなきゃやってられないっつーか、違和感だけ。自動返答機能のおかげでナディアスとしての

見た目を維持出来てるんだろうなっていうのは、この短い時間の中でも十分理解出来る。

親友と対話して、違和感がないなら問題はないし、多分アフィデイス以上に親しい人間は存在していない。

記憶の海を漂うようにナディアアスを探れば、友達はアフィデイスだけ。だけならもうちょっと労われよ、とつつこみをいれたいくなるけど、本人が問題視していないようなのでスルーしておこう。

というか、あんなにバイタリテイに溢れすぎてんのに、何を言っているんだこの男。口を開いたナディアアスの中身は私だけど、自動返答はあくまでもこの身体に刻まれている言葉の数々だから、ナディアアスが常々そう思っていた事は間違いないんだけど…納得いかないのは私だけか？

本命や愛人を山ほど。それこそダース単位で抱えてる所か貢がれ人間を多数所持していそうな性格と美貌の持ち主。そして私の身体を奪って子孫繁栄に励んでやるぜ、と宣言した癖に、独身を貫くというのはどういう見だ。

内心では自動返答につっこみ突撃苛々を募らせている私だけど、見た目はあくまでも無駄に色気タップリのナディアアスのもので、しかも面の皮も厚いのか表面上はいつも通りのふてぶてとしたもの。アフィデイスは気が付かずに、眉根を微かにだけどピクリと動かしした後、はぁ、と溜息を吐き出した。

これは、諦めが混ざったものだ。

「ナデイがそう言うならひくけど……これ以上機嫌が悪くなるなら潰すぞ」

溢れんばかりの輝かしさと爽やかな微笑。

シャラン、と髪につけられた石が澄んだ音を鳴らしながらそれに華を添える。

さらりと爽やかに、そしてあっさりと言われた言葉なのに、どう

してだか一瞬にして背筋が冷めた気がした。

誤魔化すように鎖骨の下辺りで止まっていたボタンに手を伸ばし、のろのろと一つずつ留めていく。時間稼ぎにというか、少し整理する時間がほしい。

この爽やか美形の背景にオドロオドロとした黒いモノが見えただなんて、ナディアスに毒されてるんじゃないかならうか。

いやしかし、少し遅れてくる情報を噛み砕いてみれば、アフィデイスはこんなもんだと答えが出ている。

つまりあれだ。

この見た目爽やか美形の見るからに紳士的な騎士の兄ちゃんは、所詮表の顔というヤツだ。

実際はナディアスの、と断定していいのかは首を傾げなくなるけど、とりあえずナディアスの憂いを晴らすつもりなら、この小国を滅ぼすのも構わないと思ってるらしい十分すぎる程の危険人物。

ああ、間違いなくナディアスの親友だよ。

コイツも十分危険人物だ。

そりゃ危険人物同士、手綱なんてつけとくわけがない。

既に会話を放棄したい心境だったけど、ここで放置を決め込めば本当に城を一刀両断しても不思議じゃない本気の言葉に、私は面倒そうに腰掛けていたベットに倒れこむと、

「んな事でデメエにやつあたりなんかしねえよ。とりあえずこれ以上税金ドロしない為にも仕事にいつとけよ」

まあ、やつあたりを心配してるわけじゃないって知ってるけど。でも、あえてソレを口にしたナディアスに、アフィデイスは仕方ないなとばかりにくだけた笑みを向けてきた。

あー。うんうん。

そうやって見ると、対岸に避難して絶対的安全領域から見学したい美形だって事はかわらないんだけどなあ…。



### 3・とりあえずご飯は大事

危険人物的な発言を余す事無く發揮してくれたアフィデイスを見送り　というのはちょっと疑問が残るけど、とりあえず外に追いつきながら漸く一息つけた気がした。  
とりあえず。

そう、とりあえずだけど、アフィデイスの不規則な仕事が終わるまでは一人の時間が出来たはず。  
そんなわけで家捜しスタート。

……。

概ね、家具なんかは同じだね。

引き出しに鍵がついてるし。

それが魔法道具とかそういう類の物もあるらしいけど、部屋の鍵は普通の一般的な物にちょっと細工を加えたものらしい。

この、ちよつと、っていう所が相当だと思っただけだね。元々、この屋敷自体防壁って言うのかな？　色々な対策をひっくるめての防御を固めているから、室内に気を配る必要はないみたいなんだね。

記憶の海を探れば、えげつない。本当に心底えげつない細工が施された土地。許可を得ない者が害意なく入ろうとすれば、入り口に戻される程度で済むらしい。

へえ、害意なくて入り口ねえ。

害意があるのは？なんてのは探らないよー。

言葉に言い表せないものだっていうのは予想がつくからね。

部屋の中を好き勝手探索してたら、お腹がくう、と控えめに自己主張。

ナディアスは食べないみたいだけど、中身が私の所為かお腹が減るといふ感覚に耐えられそうになくて、仕方なくキッチンに向かつて歩き出した。

さて、コヤツは食べないけど、冷蔵庫　　ってあるんだろうか。  
ふあんたじく世界だよな？

ないんじゃない？

あ、でもちよつと待て。

なんかそれっぽいのは魔法道具である。

よっし。食材がなければ買いに行けばいいんだ。

そんな結論に至った私といえば、さつさとキッチンに到着後、食料の確認。よしよし。保存の魔法をかけて腐らないようにしているのだけは褒めてやってもいいかな、なんて上から目線な言葉を思い浮かべながら、記憶の海に必要な知識を取り出す作業を開始した。

三食食べない割りに、料理はしっかり作れるんだ。

あー…寧ろ天才型だ。

1つで10理解するってどういうの？

料理も本を読んだり、人がやってるのを見てあっさり覚えちゃったっていう感じ。元々食べる事が好きな私としては有り難いけど…。

礼を言う気にはまっただくなれないけどねー。

さてはて。沢山の食材と真新しい調理器具を目の前に、私はとうと髪を後頭部辺りで一まとめに縛りつつ腕まくり。記憶の片隅にあったエプロンを引っ張り出して装着。右手には包丁左手には食材。調味料は一通り揃ってるし、私とナディアスの感覚で味の把握は完了済み。これで朝食作りを阻むものはいなくなったから、遠慮なく調理開始。

この贅沢すぎる食材を贅沢を、本当に贅沢に使いつつとりあえず朝食作り。その横では夕食と昼食の仕込みを同時進行で開始する。

鳥が丸ごと一羽。原型のままであつたら流石の私でも泣いてしまふ。いそうだけど、直ぐに調理出来る状態で保管してくれてたから大丈夫。

ご飯とか香草とかその他色々を詰め込んで、これは夕食のメインで頂こう。コラーゲンたっぷりな料理はやはり女としては捨てるのが難しい。まあお肌はぶにぶにしてるから大丈夫、と思いつついついコラーゲンの文字入りの食べ物に手を伸ばしてしまう。そんな感覚はやはり肉体が変わっても健在で、身体に良いより何より、肌に良さそうな料理を二品程作り、後はその場のノリで下ごしらえを終わらせた。

お腹がすいてたのか、かなりの量を作りそうな勢いだけど、ある意味地球より便利な保存方法があるからその辺りは一切考慮しない。魔法とか概念とかさういった諸々の素養とか知識とか。確かに、私の感覚がついていけば使えるっぽいしね。

身体の中の何か 魔力の事だけど が動く感覚とか、手の平から放出されるむず痒い感じとか、その辺りは魔法とは無縁の世界に居た私には慣れないし意味がよく分からないけど、料理を保管する為ならば捻じ伏せて使おう。

だって、作り置きして賞味期限を気にしなくていいんだよ。

それは便利でしょう。

使わなきゃ損でしょう。

だって、この世界で取り合えず生きてかなきゃならないし。

食べる事で開き直った私の行動は多分、他の人が見たら呆れる程早かったんだと思う。さつさと魔法を使う感覚に根性で慣れて、それと同時に知識を自分のものとして定着させる。

一々タイムログがあるのは面倒だから、それはナディアスの引き出しじゃなくて自分の引き出しにさつさと納めて、ささいな事でも

その都度確認していく。

身体の事はまったく慣れそうにないけどね。それ以外はナディアスの博識も手伝って思いの外早く慣れそうな感じだなあ、なんて手作りオーブンの火加減を確認しながら、急速に私の魂がナディアスの身体に馴染んでいく気がした。

力が同じとか。

そう言っただけど、ひょっとしてそれも関係あるのかもしれない。

勿論、在る一部分を除いてだけどね！

それについていは妥協は、まだ出来ない。

控えめな胸がまっ平らになった事も衝撃だし、当然下半身を見る勇氣はない。

トイレに行くまでの僅かな時間だという事は重々承知しているけど、これだけは最後の足掻きを試してみたい微妙な乙女心というやつにしておこう。

元々、女とか男とかそういった性別的なモノが薄かった人間の言う台詞じゃないけどね。

あ。

ピザが焼けた。

チーズトロトロ。ベーコンはジュウジュウと音をたてながら見た目的にも美味しそうに出来てる。

ナディアスが人を雇って牧場をやってるから、乳製品を使った料理はこれからも活躍しそうだし、人に配るのもいいかもね！。

流石に私はそれで商売はしないけど、雇った人たちにしてもらおうのもいいだろうし。

しかし…。

うん、あんまり気付きたくないけど。

ひよっとしてアヤツは……結構前から私と入れ替わる計画をたてていたんだろうか。

それこそ姫様との見合い話が出た初っ端の方から？

地球の食生活に似た環境を手に入れ、人を雇って流通を良くさせてる。

勿論、台所用品を自分は然程使わないのに揃えて、料理の知識から雑学からひたすら脳に詰め込んでる。

多分、入れ替わった後私が困らないように、最大級の姫様との見合いという障害以外は、割とどうにでもなるようにされている気がしないでもない。

いや、でもね。

やっぱり最大級の障害の荷が重過ぎるんだけど？

まあ、そんな事を思わないでもないけど……。

ピザは温かいうちが美味しいね。

考えても仕方ない事は後回しにして、ピザを皿に乗せて部屋へと戻ってみた。

そこにアフィデイスがいた時はどうしてくれようと思ったけどね。

っつーか、さっき追い出したばっかだよな??



#### 4・駆け抜ける寒気

「俺の飯がなくなるだろうが。ちったあ遠慮しろよ空気の読めねえ野郎だな」

と、ピザを遠慮のえの字もなく頬張りまくるアフィデイスに、私は呆れたような言葉と視線を投げつけた。

結構大きめのピザがあつという間にアフィデイスのお腹の中へと消えていく。サラダ作つという良かったね。本当にそう思うアフィデイスの食欲。

「朝食食ってねえのかよ？」

「いや、食つたよ」

何を当たり前のこととばかりに言われた言葉に、くらり、と頭が揺れた気がする。

しかも、せめてとばかりに皿の上へのせられたピザ二切れが私の前へと置かれた。なんか、自分だけが食べるつもりだったピザの大半が食われ、そして作つという良かったなあ、と思つてたサラダの大半もアフィデイスのお腹の中へと消えていく。

朝食を食べるとしてこれなのか。

朝食を食べなかつたらどうなんだろうかという疑問が沸き上がるけど、アフィデイスはこんなものだとすぐに納得しする。

というか、アフィデイスが食べるなら、このサイズのピザを後5・6枚は準備しなきゃ間に合わない。

細々と、アフィデイスが回してくれたサラダとピザを食べるんだけど、全然足りないんだよなあ。こんなに細いのに、この身体も結

構食べるんだよね。

私と同じくらい。

好き嫌いも同じっぽい。

「というか、力が同じなだけだと思ってたら、この辺りの日常から被ってるのかもしれない。それはかなり嫌だなあ、なんて思いながら、私はスープに手を伸ばしたアフィデイスを無視して立ち上がった。」

「どした？」

「テメエが食った分だけ足りなくなっただよ。」

調子にのって下ごしらえしたのがこんなに早く活躍するとは。

立てた指を折りながら、今から何を作ろうかと悩んでいる私の横を、一瞬でスープを飲み干したアフィデイスが並ぶように歩く。

「というか、アンタは何でそんなに食うのにそんなに細い。」

見るからに。そう、見るからに無駄な筋肉一つついていない均整のとれた身体。この知識は、ナディアスのものだったりもするんだけどね。

風呂に奇襲された時に見たらしくてね。そしてナディアスの記憶力がいいから、バッチリとその身体の細部まで覚えて……って思い出したくないわツツ。

「ナデイが飯作るって珍しいよなー。いつも召喚獣だろ。」

「あ？ 不味かったか??」

「いや。ナデイの召喚獣の作るのも美味いけど、やっぱりナデイの方が美味いぜ?」

「…深い意味はねえよ。偶々だ」

「というかさ、召喚獣に作らせてるなんて思わなかったんだけどね。」

随分馴染んだと思ったけど、日常のそんな事まではやっぱり知識の海を探らないと駄目かっていうか、ホントに作らせてるんだ。歩きながら記憶を呼び覚まさせてみるけど、甲斐甲斐しくナディアスを世話する召喚獣の姿が二体。

男性と女性。これまた美男美女のナイスなバディの持ち主たち。頭とお尻に見慣れないものが生えてるけど、それはアレだ。

アレ。

うわ〜い。ふぁんたじ〜。

の一言で解決だ。

つつーか、魂の契約って …… 中身別人じゃマズインじゃない？ ナディアスが残した知識は大丈夫だと言っているけど、実際呼び出して見ない事には分からない。

当然アフィデイスがいる前で出来るわけもなく、私は表情一つ崩す事無くキツチンに舞い戻ると、さつきかけたばかりの保存魔法の下ごしらえの中から、朝食に向いてるものを何点か手に取る。

「あいつらに頼んだ方が早いんじゃない？」

「まだ食つ気か？」

だから、アンタがいると確かめられないんだって。とは口に出せず、私は本日二度目になる呆れた眼差しを向けてみた。

「あ、食つ食つ。美味しい。しかし変わった料理ばっかだよなあ

…美味しいから、いいけど、さ？」

「……………」

何故、態々言葉を区切る。

意味がわからん。

そして、そのアフィデイスの言葉に何でか背筋がゾツとして、思わず身体を走り抜けた感覚に首を傾げそうになった。

何か、ロックオンされたっていう感じ??

異性からそんな事された事はないけど、同性からならあるから間違いないような気もする。

包丁をリズムよく動かしながら、横目でアフィデイスの姿を確認してみた。おかしい所は何一つない。知識の中のアフィデイスの姿とぶれる所もない。

なのに違和感だけが付きまとう。

付きまとうのに、その違和感の正体だけがわからない。

おかしいな。私自身結構感の良いし、その感に助けられた事もあるんだけど…。何か詰まったようなはつきりしない感覚に、気持ちの悪い思いをしながらも私は手早く料理を完成させる。

うん。鼻腔を擽る美味しそうな匂い。

シチューを器に移して、パイ生地で蓋をしてオーブンもどきで焼き上げた。ついでに、パン生地を焼き上げて、シチューをつけて食べよう。ついでに残りの野菜と粉チーズとドレッシングでシーザーサラダを作る。勿論、カリカリに焼いたベーコンとパンの耳もサラダに散らす。

よし、美味しそう。

取り皿とフォークは二つずつ。アフィデイスに放り投げると、私はキッチンに備え付けられていた椅子を引き出して腰を下ろした。面倒だからここで食べてやる。

無言のまま食べてだした私の向かい側に腰を下ろして、アフィデイスも容赦なくシチューとパンとサラダを食べだした。二杯目からは普通のシチュー。寸胴鍋いっぱいには作ってはあるんだけど、それも終わりそうだなあ。

それにしてもよく食べ過ぎるアフィデイスを視界に収めないようにしながら、今度は自分の分を確保しながらひたすら口の中へと放り込む。

ゆっくり食べたいけど、きっとそれは叶わないだろう。

アフィデイスの食べる量やスピードを見てたら、自分の皿すら危ないんじゃないかな。

「美味しいよ。相変わらず料理が美味いんだな」

「滅多に作らねえけどな。つつーか、テメエに食わせる分は量に入れてないんだけどよ」

「ははっ。堅い事言うなって。いいじゃん。滅多に食べれない…料理なんだからさ?」

まあ…いいんだけどね。

人に食べてもらうのは嫌いじゃないし。

「つつーか、食ったらマジで行け。税金ドロしてんじゃねえよって言うてんだろっが」

というかさ。

そろそろ、本当に一人の時間が欲しいんだけどね。

そんな私の本音が伝わったのかどうなのか、アフィデイスはご馳走様という言葉を残して、今度こそ屋敷の外へと出て行った。

転移で一瞬。ホント、魔法って便利だね。

## 5・麗しの召喚獣

さてはて、と腕を組み、真面目な顔をして魔法部屋というふあんなたじーな部屋にただ一つ置かれた椅子に腰掛けてみる。

ナディアアスの知識からだけど、この部屋はその名の通り魔法関係に特化させた部屋みたいで、増幅とかそういった効果もあるらしい。実際、私が自分の眼で見たわけじゃないから、らしいって言うっちゃうけどね。

この部屋でやる事といったら、アフィデイスが言っていた召喚獣というヤツだ。流石に、ナディアアスと魂の契約を交わした召喚獣に嘘はつけないから、事実を話さなきゃいけないだろうけど。

すう。

はあ。

呼吸をしながら勢いよく腕を振り上げ、振り下ろす。

柄にもなく緊張するけど、仕方ない。ナディアアスの身体にいる今としては、絶対に避けては通れない道。

息を吐きながら、身構えるわあけでもなくいつものようにゆっくりと唇を動かす。

「召喚獣　セキエイ。セイアル。俺の声が聞こえたなら出て来い」

ちなみに、セキエイが男性。

豹の召喚獣。色彩は金に小麦色の肌。細マッチョというか普通の

マッチョというか。かといってムキムキしてるわけじゃない均整のとれた体躯。簡単に言ってしまうえばカッコいい、になるのかな。

そしてセイアルが女性。

ベースが鷹の召喚獣。色彩はこげ茶。ちょっと憧れるメロンの持ち主で、出る所はしつかりと出てしまる所はしつかりとしまってる。鷹の召喚獣だけあって気の強そうな眉と眼差し。鷹がメインだけど、祖母が虎だったらしく、セキエイと同じく可愛い耳と尻尾が生えている。

相当の美女。年齢は二人とも私より上かな。

誰の趣味だか知らないけど。ナディアスの召喚獣って事は、多分ナディアスの趣味だと思われる服を着てる。

……メイドと執事の格好。セイアルのスカートは清楚なロングスカート。絶対領域も捨てがたいけど、こういう長いスカートもいいよね。

じゃなくて。

ナディアスと趣味が同じかもと考えてしまうような危ない思考には蓋をして、私はいつもセキエイとセイアルが現れる場所を見つめた。

両手を組んだ後、目を閉じる。

無意識に両手に力が入り、皮膚に爪があたる。柄にもなく緊張してるらしい。

「ナデイ様。美しいお手に傷がついてしまいます」

「ナデイ様。私たちは貴方様もお傍に。恐れる事など何一つありませんわ」

私の両手を絡め取るように、鍛えられた指先が私の手を浚う。背中にあたる感触は柔らかく、抱きしめられているという事に驚きながらも私は目を開けた。

目の前にはセキエイ。爪跡を消毒するように舌先で舐めあげる。流石豹。セリアルは肩に顎を乗せるようにして後ろから抱きしめている。

……どうしよう。

こういつのつて慣れてないから、素で迷う。

というか、セキエイは兎も角セリアルも私より身長が高いんだ。迫力美人だね。

「……話さなきゃいけない事があるんだ。私は……」

誰かに対して、ナディアスの自動会話を使わないのはちょっと勇気がある。肉体はこの世界の住人であっても、中身は地球人の私。しかも、この二人はナディアスに対して深い情愛を向けている。私の所為じゃないけど、この二人にとってみたら私という存在があるからこそナディアスが帰ってこないのだ。勇気を出した私に、セキエイが微笑みを向けた。

「知っていますよ。キリカ様　ですよね」

「……知ってる、んだ」

蕩けそうな極上であろう笑みを向けられたんだけど、言われた内容は驚きそのものだった。分かっているのに、私にナディアスと同じモノを向けてくる。肉体がナディアスだからかな、とふとそんな考えが過ぎれば、それを感じ取ったのかセリアルが小さく首を横へと振ってくる。

「私たちが膝をつくののは、魂のみです。例えば肉体が主のものでも、魂にその価値がなければ殺します」

「セイアルの言うとおりです。我らの主は、我らが決めます」

表情は綺麗で、有無を言わさない強いものがあるんだけど、実際の口から飛び出た内容に心臓がドクリ、と嫌な音をたてた。

殺すという言葉はやっぱり怖いな。なんて思う。

それと同時に、ここがどうしようもない程異世界でしかないという事実が、波紋を描くように身体に浸透してくる。

何て言っただけかわからず、唇を噛み締めながら二人から視線を外すと、セイアルの腕に力が込められたのがわかった。

「お怪我を……」

「え……と……」

ペロリ、と舐められた唇。

戸惑いの声が漏れたんだけど、セキエイは気にせず傷口から流れる血を全て舐め取るように舌を小さく動かす。

「……もう大丈夫……」

傍から見てどんな光景なんだろう。

小麦色マツチヨが美男子の唇を舌先で舐めてるのって……。ナデアスの場合はセキエイじゃなくてセイアルの方がこういうのをやるイメージがあるんだけど。

「自分でも舐められるし、傷も深くないからもういいよ。ありがとう」

これ以上は流石に恥ずかしいという事で、残念そうな表情を浮か

べるセキエイの胸の辺りを右手で押す。軽く押すだけで引いてくれたって事は、そろそろ頃合いだと思ったのかな。セリアルも私から離れて正面に回った。

どうやら話し合う態勢をとってくれた二人に安堵しながら、私は私の表情で立っている二人を見上げる。

こうやって見下ろされると、やっぱり迫力があるね。

二人とも私より身長高いし。

「改めて自己紹介から。私は蔵持霧佳。知っての通り、ナディアスと中身を交換してここにいるんだ」

ここで、一回息を吐き出すしたんだけど、二人の視線は私の一挙一動を見逃すまいとばかりに、私から視線が外される事はなかった。

「二人が私の声に応えてくれるかを確認かめようと思って。

元の身体に戻るまでナディアスとして暮らすつもりなんだけど、やっぱり二人が呼べないのは不自然だしね」

とは言っても、本音としてはまだ吹っ切れないんだけどね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2646t/>

---

KURAKAMI

2011年10月19日23時52分発行